

目 次

まえがき 2

第1部 社会と構造

- 古代都母の地域様相……………宇部 則保 9
北上盆地の古代村落……………八木 光則 35
古代秋田城と胡桃館遺跡……………船木 義勝 67

第2部 集落と建物

- 集落・竪穴建物動態から見た北奥古代史……………齋藤 淳 97
竪穴・掘立柱併用建物の成立と展開……………高橋 学 143
竪穴建物の周堤……………五十嵐 祐介 177

第3部 土器様相の変遷

- 古代北東北における高台付供膳具……………福島 正和 213
東北地方北部出土の須恵器壺・瓶類……………村田 淳 233
比内地方における9～11世紀の土器様相と画期……………嶋影 壮憲 275

執筆者一覧 298

あとがき 299

まえがき

本研究会は北東北地域の平安時代(9～11世紀)の集落遺跡を対象にして、広域土器編年の構築と竪穴建物跡の集成を目指し、共同研究(2010年～2014年)の成果報告書『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』(2014年)【以下、「北東北報告書」と記す】を刊行した。竪穴建物跡集成 11,642 軒のデータは、時期・形態及び構造・カマド・火山灰堆積・出土遺物・文献などを書き込み、付編(CD-R)に収載した。

「北東北報告書」の第1章では、データ作成の基準と検討項目を提示した。第2章では北東北地域を9地区に分けた上で、各地区の土器編年と竪穴建物跡の集成を行った。第3章では各地区・時期ごとの竪穴建物跡数を総合し、推移の時間差と差異を利用して年平均人口増加率の算出を行った。

古代北東北史の考古学が抱えている大きな課題の一つは、いわゆる「防御性(区画・囲郭)集落」の形成過程と終焉をめぐる論争であり、さらに北東北の北半部と南半部におけるヒトの動態(移住・移動・避難など)に関することである。

これらの諸課題に対して、本「北東北報告書」が提起した広域土器編年と竪穴建物跡の集成が、考古学研究者間の議論の土台となり、さらに考古学と古代中世史学研究者などとの共通言語を創造する礎となることを期待している。

本書は「北東北報告書」が刊行された直後の研究会で、会員自身がそれぞれの立場から「北東北報告書」を基礎にした論文を書いてみようという趣旨で編集されたもので、執筆希望者9編の論文集となった。

本書所収の諸論文は、第1部「社会と構造」、第2部「集落と建物」、第3部「土器様相と変遷」に分けて編成してみた。

以下、執筆者自身の論文要旨である。

第1部 社会と構造

宇部則保「古代都母の地域様相」

北東部の蝦夷社会の拠点の形成、変遷について青森県東部に想定される「都

母村」の集落，末期古墳の動態から，7～8世紀前半の奥入瀬川・馬淵川下流域が太平洋沿岸の海上交通，内陸部への陸上交通の接点となり，この時期の南・北との交流適地となっていたこと，9世紀後半の奥入瀬川下流域に出羽型甕，赤焼土器などに象徴される出羽の様相が現れていること，さらに10世紀の陸奥湾東岸域，六ヶ所地域に成立する新興集落が律令社会と北海道擦文社会とをつなぐ新たな生産活動や物流の拠点となっていた見通しを示した。

八木光則「北上盆地の古代村落」

盛岡市南西部の村落の分析を行い，住居－単位集団－集落－村落－村落群の5段階の視点から，古代の地域社会復元を試みた。その結果，より具体的に集落の動態がわかり，かなり流動的な社会を形成していることが明らかとなった。また末期古墳の変遷とも関連して家長の威信の弱体化と，掘立柱建物跡を拠点とする新有力者の台頭などを指摘することができた。

船木義勝「古代秋田城と胡桃館遺跡－秋田城四天王寺と胡桃館C建物を中心にして－」

『胡桃館遺跡埋没建物部材調査報告書』によれば，胡桃館C建物には仏堂の本尊が位置する土間があり「天台系寺院」の特徴と指摘されている。では，この天台系寺院の系譜はどこに求められるか。検討の結果，秋田城と秋田城付属寺院四天王寺を遡源とすると推察した。

北東北の土師器長胴甕については，「陸奥型甕」「出羽型甕」「北奥型甕」の分布と年代を取り上げ，なかでも北奥型甕分布圏の中で発見される出羽型甕に注目してみた。秋田城・秋田郡内など日本海沿岸部の出羽型甕は，やがて米代川流域から峠(貝梨峠－梨の木峠)を越え，そして安比川を流下して馬淵川との合流点に，さらに三八地域，上北地域に達する。この河川に沿った村々は，東西交通路の要衝拠点(時には軍事的要衝となる)でもあった。

胡桃館遺跡成立の背景には，米代川に沿う東西交通路の確保と治安維持，有事に備えた武の力(暴力，武力?)を所持する構成員などを抱えねばならなかった社会的要請があったと推察した。同時に胡桃館遺跡が存続した頃の北奥社会は，極端な人口増加と減少の動態期にあり，混沌と動乱が渦巻く変動の時代でもあったと指摘した。

第2部 集落と建物

齋藤 淳「集落・竪穴建物動態から見た北奥古代史」

「北東北報告書」の付属データをベースに、7～8世紀の竪穴建物跡も加えて、北奥の古代集落・建物の定量分析、あるいは種々の属性分析を通じて、その意味について検討した。集落・建物の動態パターンからは、北緯40度付近を境界とする南北差、奥羽山脈を境界とする東西差という都合4グループに分類されたが、それらは土器属性の分析結果とも調和的である。これらのグループ間においては、推移の時間差や変移量の差異、集落立地や各種建物属性の違い等がみられるが、マクロ的には、7～8世紀にかけて古代前期集落が成立、9世紀前葉の城柵・建郡期を経て中期集落が出現・拡大、10世紀後葉城柵体制の終焉前後に後期集落が成立、11世紀代に中世的集落・建物へ転換するという大きな流れが読み取れる。

高橋 学「竪穴・掘立柱併用建物の成立と展開」

「竪穴・掘立柱併用建物」とは、竪穴建物に掘立柱建物が接続あるいは並列し、両者が一体となって機能した施設を指す。遺構分布の中心は北緯40度以北の東北北部にあり、多くは9～11世紀に構築された。その成立は7世紀の北陸西部(石川・新潟)に求められ、8世紀に入ると東北南部(福島・山形)に伝播する。これは城柵等造営の北進とも相関するのであろう。東北北部での受容と拡大は、当該地域において二室構造の建物が手工業生産工房兼住居として最適と判断されたことが大きいと考える。また、本構造を採る建物の展開は日本民家成立の遠因とも想定される。

五十嵐 祐介「竪穴建物の周堤—北東北地方における周堤のあり方の考察—」

本論は竪穴建物の周堤について検討したものである。周堤はこれまで漠然とあることが予測されてきたが、その根本的なあり方が議論されてはこなかった。そこで、北東北地方を中心に検出例が多い、くぼ地化した竪穴建物跡に残る周堤を「くぼ地埋没型周堤」、近年検出例が増す災害により埋没した竪穴建物跡の周堤を「災害埋没型周堤」と分類し、事例を踏まえて、そのあり方を考察した。

その結果、土屋根の下端と周堤は必ずしも明確に区別できる構造ではなかった可能性を指摘し、竪穴建物建築前の旧表土と周堤構築の関係性から地ならし効果の目的があったことを指摘した。さらに、周堤構築のパターンから建物本

体の崩壊過程に準じた周堤の崩壊のモデルを提示し、発掘調査によって遺構として確認される周堤のあり方を提示した。

第3部 土器様相と変遷

福島正和「古代北東北における高台付供膳具」

北東北における土器様相を高台の付された供膳具を用いて、当該地域の特性について論じることを主眼とした。論じる過程で、高台付供膳具の出自・系譜、型式分類、型式編年、消長・画期、分布傾向、地域性について分析を行った。その結果、9世紀初頭、陸奥の城柵周辺で導入されたこれら高台付供膳具は、徐々に出羽地域や津軽地域へ拡散することが想定された。しかし、その定着や拡充には地域差があり、受容する在地社会と律令側との関係性に地域的特殊性が存在する可能性を推論した。

村田 淳「東北地方北部出土の須恵器壺・瓶類—消費地出土資料の分類と変遷—」

東北地方北部で出土する産地不明とされる須恵器壺・瓶類の須恵器の特徴を整理し、様相を把握することを目的として、器形判別が可能な事例をもとに類型化を行って各地区の様相を確認する。また、合わせて窯跡出土資料の代表例を提示し、それらとの比較を行いながら各類型の分布、器形・製作技法の変化、地域差の有無について検討を行い時期的・地域的変遷についてみていく。

検討の結果、消費地遺跡で出土する産地不明の須恵器壺・瓶類は、9世紀後葉を境に頸部の短小化・広口化、非回転ヘラ削りの採用、高台の低平・無高台化といった変化が起こることが確認できた。ただし、これらとは異なる特徴を有する資料が出土する地区もあり、それらの地区では未発見の窯跡が存在する可能性がある。

嶋影壯憲「比内地方における9～11世紀の土器様相と画期」

筆者は本会研究会において鹿角・北秋田・山本地区(米代川流域)の土器編年を担当し、その結果、同じ米代川流域内においても土器様相は一様ではなく、各地域によって違いが認められた。そこで、本稿では筆者が所属する大館市(比内地方)所蔵の土器に限定し、十和田aテフラや五所川原産須恵器等から時期の考定を試みている。また、これらの土器の変遷案を提示し、9世紀後葉～11

まえがき

世紀代に位置づけられる土器群の様相や変化、さらにはそれを及ぼした背景について考察した。

本研究会の共同研究(2010年～2014年)の成果報告書『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』(2014年10月)は、北東北古代集落遺跡研究会のホームページからダウンロードすることが可能である。

なお、上記ホームページでは「竪穴建物跡集成追加データ」として、「岩手・紫波地区(盛南地区遺跡群)竪穴建物跡集成の追加データ」(2018年4月)も公開している。併せて活用していただければ幸いである。

2018年10月

執筆者一同